

遠州荒井の濱より奥の山五里ばかり海となりて大舟も出入事むかしは山についたる陸地なりしが、中比山よりほらの貝おびたゞしくぬけ出て海へ入ける、其跡かくのごとく海となりて、今切と名づくるよし古古いひつたへたり○下略

〔東海道名所圖會三〕今切(中崩略)後柏原院御宇永正七年八月廿七日、螺の貝出で、

〔兼葭堂雜錄四〕筑前國遠賀郡の浦人どもの中に伊万里の陶器を船に積て諸國を廻り渡世となす者あり○註天明二年寅の五月、奥州津輕にいたり、舟宿に滞留し、乘組の者銘々日毎に荷をかつぎ市中を徘徊して賣めぐりけるに、其内に有し一人○註或日山路に踏まよひ、そこはかとなく吟ひけるに○中女房の洗濯し居たるに逢ひ○中あはれ簣子のはしに成とも、こよひ一夜を明させ給はらば、一命を助け給ふにひとしかるべし、偏に頼み入候と手を合せて頼みければ、女房のいはく、商人には何國の人にて侍らふやと、商人答へて、われは九州筑前のものなりと、此女いとおどろきたるさまで、あらなつかしの筑紫人や○中抑わらわは山鹿の傍庄の浦○註略といへる處の賤しき海士の子にて候ひしが○中男子女童二人持はべりしが、最孝心にして枕に附そひ歎き侍りしに、或日磯に出て、一のほら貝を拾ひ歸り、これをよく煮調へず、め侍りしが、其味ことの外よろしく覺へしより、少しづゝ食事にもとづきけるゆへ、朝夕二三日の間、貝をさいとなして、終にことごく食せしが、頓て病本復せしより、身體もとより倍て健になり、其後は更に病といふ事を知ず、幾春秋を重て、老衰の貌もなく、所謂不老不死の薬にてもや侍りけむ、今思ひ巡らすには、や六百餘年と申昔語にて、我ながらいといぶかしき身上に侍なり○中さる程にいつしか住馴し故郷も住うく覺へければ○中子孫のもの、所の人々に暇を乞て○中都の方より、吾妻の國々を経歴さいつ頃より、此陸奥の津輕の郡にまいりしが、又もや人々のわりなく申給へるに固辭がたく、此家のあるじに嫁づきはべり、我身○中故郷を出し頃、かの嘆嚙(はらがい)